

C.G.ユング「個性化」論における他者性の問題

—ユングの転移論による検討—

教育学コース 小木曾 由 佳

An Examination of 'Otherness' in C.G.Jung's Theory on Individuation:
Through his Argument about Transference

Yuka OGISO

This paper aims to reveal the meaning of the relationship with others for C.G.Jung's idea of individuation. There are some criticism pointing out the lack of 'otherness' in his theory; the typical one is by M.Buber. This paper finds a clue to answer them in Jung's argument about transference. He regarded 'transference' as a form of relationship and the most important element of individuation.

Our discussion, through the analysis into *The Psychology of Transference*, is led to the two results; one is that the relationship with a specific 'Thou' is essential for the process of individuation in three ways, and the other is that the process of individuation can be described as a cycle and demands other people throughout the life.

目 次

はじめに

I. C.G.ユング「個性化」論とその批判

II. ユングの転移論

III. 関係の中での個性化——『転移の心理学』分析

A. 『転移の心理学』概要

B. 「客観的な関係の過程」の三形態

C. 目標としての「自己」・過程の循環性

おわりに

はじめに

「個性化 Individuation」とは、分析心理学の創始者 C.G.ユング(Jung, Carl Gustav 1875-1961)において、人生全体にわたる人間形成の過程を意味する語である。ユングによって「自己実現」¹⁾とも言い換えられるこの「個性化」の理論は、人間の心理的成熟を主題化したものとして、幅広い文脈で引用されてきた。

しかるに、「自己実現」の問題が語られるとき、個人の内的な成長という側面が強調されるあまり、社会的現実としての他者との関わりが度外視された議論が目につく。ユングの理論もそのようなものとして引用さ

れ、解釈されることが多い。しかし、ユングの意図した「個性化」は、本当に現実的な他者を必要としない、単純に内的な心理過程であったのだろうか。ユングはあくまで臨床的な見地から、他者との関わりの中での日常の現実生活を重視していたはずである。「個性化」論を単に内的な過程と読む限り、ユングの真意は見落とされてしまうように思われるのだ。ある個人の「個性化」に他者はどのような影響を与えうるか。他者の「個性化」を助けることは可能か。こうした観点から、ユングの「個性化」論を問い直す必要がある。

ユングが人生後半の課題であるとした「個性化」の問題は、「自我」のあり方の多様化した現代において、必ずしも直線的な時間意識によって限定することのない、より実践的・応用的な新たな読み直しを迫られている。本論では、そのための切り口として、「個性化」論における「他者性」の問題に焦点を当て、「個性化」論の再検討を行なうことを目的とする。

I. C.G.ユング「個性化」論とその批判

「個性化」という語に込められるニュアンスは、ユング自身の中でも変化していくため²⁾、その意味を一義

的に定めるのは困難であるが、ここではさしあたり「個性化」を「自我 Ich が無意識的内容と直面することによってその一面性を補償され、心の全体性(自己 Selbst)を実現していく過程」としておく。

このユングの「個性化」論は、西洋近代的な自我発達のモデルを相対化し、老いや死までを含めた人生全体の問題を射程に捉えたという点で大きく評価される反面、心理学内部のみならず、哲学、倫理学、宗教学など、さまざまな学問分野からの批判もなされてきた³⁾。なかでもとりわけ目立つのが、「個性化」論に他者性の欠如を見る論である。これらの批判は、主に以下の二点を特徴としている。第一に、ユングの「心的現実」の立場が、主観のみを考察の対象とし、他者は主観において構成されるかぎりでしか問題にならないという自我論的認識論に立脚していること、第二に「個性化」が目指す「自己」の概念は、結局「自我」との区別が曖昧であり、「自己」への統合を規範とするかぎり、他なるものが自己実現のための単なる手段になってしまうこと、これらの点を根拠として、「個性化」論における他者への倫理的配慮の欠落を指摘するのである⁴⁾。

代表的なものに、M.ブーバーによる批判⁵⁾がある。「対話」の思想で知られるブーバーは、「宗教と現代的思惟」(1952)⁶⁾において、現代の無神論的傾向を代表する思想家の一人にユングをあげ、「個性化」とは「実存の中心を『自己』へ移しかえることによって存在者との関係を断ってしまう道」⁷⁾にはかならないとの批判を展開した。ユングにおける他者は、「あくまで個人の心的内容として存在する」⁸⁾ばかりで現実に向かい合うものではなく、「個性化」によって他者を含んだ「自己」に到達したところで、それは「依然として自分自身のうちに閉じこもった孤立した自己にすぎない」⁹⁾というのである。これに対し、ユングはすぐに「ブーバーへの答え」と題する論文(1952)¹⁰⁾で応戦するものの、そこでは主に精神科医としての経験主義の立場の主張に終始するばかりで、上の批判点に関する直接的な言及は無いに等しく¹¹⁾、ブーバーに対する回答としては不十分なものにも思われる。ユング自身がこの問いに正面から答えていない以上、やはりブーバーらの批判の妥当性は認めざるを得ないのであろうか。「個性化」は、他者との関係を絶ち、自分自身の内面にたった一人で対峙する、閉じられた過程を意味するのだろうか。

Ⅱ. ユングの転移論

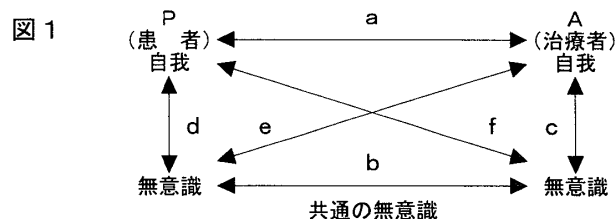
もっとも、ユングが「個性化」における他者の問題について論じなかったわけではない。たとえばある講義で、ユングは次のように述べている。

「エベレストの山頂では、誰にも悩まされないのは確かだが、個性化の可能性はない。個性化は常に関係を意味する。」¹²⁾

この箇所が続いて、無意識の集合性に飲み込まれてしまわないためには、現実的な他者との関係が不可欠に要請されることが繰り返し述べられていく。しかし、その他者との関係がいかに重要であるのか、他者が「個性化」にどのように作用するのかについては最後まで詳述されることはない。また、教育関係について論じた著作¹³⁾を見てみても、論点は親・教師本人の「個性化」の重要性へとシフトしてしまい、関係の中で子どもの「個性化」がどのように展開するかに関しては、やはり論じられていないに等しい。確かにこれらの論を見るかぎり、ユングの議論はとかく個人の内的な「個性化」の必要性に帰着してしまうばかりで、「他者に対して開かれていない」という印象を拭い去ることができないのである。

しかし、この問題を考える手がかりが僅かながら存在している。それは、ユングの転移論である。「転移」とは、心理療法の分析過程で患者が治療者へ向ける無意識的な感情の投影を指す。通常、分析治療という特殊な場面でしか問題にされない現象であるため、一般的な他者との関係の考察にとっては無関係であるようにも見えるが、以下の理由において、ユングの場合はいささか事情が異なっている。鍵となるのは、「転移」の「相互性」である。

M.ヤコービは、ユングが『転移の心理学』(1946)¹⁴⁾で示した図をもとに、ユングの考えた治療者と患者との間に生じる心理過程を図1のように示している¹⁵⁾(ただし、ここで考えられているのは実存状況における神経症。この治療過程をユングは「個性化」の一側面と考えている)。この図によれば、二人はそれぞれ自分自身の無意識と関係を持ち(c, d)、さらに二人の間には、a, b, e, f の四つの矢印で表されるやりとり(自我同士の関係・共通の無意識・自我と互いの無意識との関係)がある。これらすべてが密接に作用しあって、ひとつの場を成しているというのである。ここで注目すべきは、二人の自我・無意識をつなぐ矢印 a, b と、その間を交差する矢印 e, f の存在である。ユングの他の著作



が自我と無意識との内的な事象(c, d)を中心に語っていたために、断片的にしか明らかにならなかった「個性化」を支える関係性が、この四つの矢印によって立体的に浮上するのである。しかも、図は左右対称に描かれており、患者の「個性化」(d)と治療者の「個性化」(c)が同時に、全体的に生起している。

この問題について論じたのが、『転移の心理学』をはじめとする、ユングの転移論にほかならない。ユングが転移に関して詳しく述べているものとしては、他に「現代心理療法の諸問題」(1929)¹⁶⁾、ロンドンのタヴィストック・クリニックでの講義(1935)¹⁷⁾があげられる¹⁸⁾が、強調点の変化こそあれ、そこには初期から貫流する見方が存在していた¹⁹⁾。フロイトの精神分析理論が、分析技法としての転移の重要性を評価しつつも、治療者から患者に対して起こる「逆転移」を極力避けようとしたのに対し、ユングは1929年の段階から、転移の重要性に注目するだけでなく、逆転移もまた(とくに実存的苦悩の)治療には不可欠の要素であると考えていたのである²⁰⁾。

「現代心理療法の諸問題」においてユングは、治療とは「医師と患者が全人的に関与した相互的影響の所産」²¹⁾を意味すると述べる。医師と患者という「二つの人格の出会いとは、性質の違う二つの化学物質の混合のようなもの」²²⁾であり、混合されれば、両者ともに変化することを免れない。医師は、影響を受けて初めて患者に影響を及ぼすことができる。したがって患者からの転移と同様に、医師からの逆転移が起きるのを避けることはできず、それを徹底的に意識化すること、そのことによる医師自身の変容をも求められるというのである。ここに転移の「相互性」の考えが現れている。

6年後のタヴィストック講義では、これに加え、さらに「相互的無意識 mutual unconsciousness」という概念が登場する。医師と患者が「相互に投影し合う」転移内容が互いの無意識内容と一致するとき、二人は「相互的無意識」に捕らえられ、「同じ無意識の深淵に落ち込み、融即の状態に」²³⁾なる。この事態は、患者のみならず医師自身が「開いた傷口」²⁴⁾を持っているときに発生するという。医師と患者の双方が、その傷口ゆえに心的に感染し、「相互的無意識」に陥る危険を持つ。

ユングはその危険を繰り返し述べ、医師があらかじめ自身の傷口について知っておく必要を強調する。さらに、この後の箇所では、転移の投影内容は個人的な内容のみならず、非個人的な元型の内容を含むものであるとされる。治療の最終段階においてはこれを単に解消させるのではなく、どちらの内容なのかを慎重に区別し、非個人的イメージと内的に向き合うことが重要であり、これこそが「個性化過程の本質」²⁵⁾であるというのである。ここではもはや、医師もまた無意識に巻き込まれる危険を持ち、非個人的な元型的イメージの前に晒され、「個性化」を迫られるものとして描かれるのだ。もちろん、治療者は教育分析を受け、また多くの訓練を積んでおり、治療者と患者の関係は非対称的なもの²⁶⁾である。伊藤(2001)も指摘している²⁷⁾ように、「相互性」によってこの「非対称性」が解消されるものでないのは確かだが、ユングは両者に自明なものとして横たわる「非対称性」よりも、「個性化」の同行者としての「相互性」をむしろ強調していたように思われる。この点こそ、関係性における「個性化」の問題を考えるための一助となるのではあるまいか。

約10年後の『転移の心理学』では、「逆転移」もまた「転移」という言葉にまとめられ、それらは完全に相互的なものとして描かれる。さらに、転移現象が治療的關係から一般的な関係にまで拡張される。ユングは、転移が「一方では心理療法の過程で、他方では通常の人間関係において、中心的な意味を果たしている」²⁸⁾とし、「転移現象によって促されたり妨げられたりしなければ、親密な人間関係はおよそありえない」²⁹⁾とさえ述べているのだ。もはやユングにとって、「転移現象は間違いなく個性化過程の最も重要かつ内容豊かな症候群の一つ」³⁰⁾であり、関係の一形態ゆえに「つねに相手 *Du* を前提とする」³¹⁾ものとなった。転移、そして転移によって促される具体的な他者との人間関係が、「個性化」の必要条件とされているのである。

そこで本論では、次節にて『転移の心理学』の内容に立ち入り、他者性の考察の基盤を求める³²⁾ことにする。実際の分析に入る前に、第二章に書かれた次の記述に注目したい。

「個性化過程には二つの原理的な側面がある。一つは内的主観的な統合過程であり、もう一つはこれと同様に不可欠な、客観的な関係の過程である。そのときどきで一方がより前面に出るとはいえ、どちらも互いの過程なしには起こりえない。」³³⁾

「個性化過程」を駆動するための車の両輪になるとも読める、この「内的主観的な統合過程」(矢印 c, d)と

「客観的な関係の過程」(矢印 a, b, e, f)³⁴⁾という二つの要素が、転移関係においてどのような仕方で作用しあうというのか。以下、『転移の心理学』分析へと論を進めることにする。

Ⅲ. 関係の中での個性化——『転移の心理学』分析

A. 『転移の心理学』の概要

『転移の心理学』においてユングは、1550年に出版された錬金術のテキスト『哲学者の薔薇園 *Rosarium philosophorum*』の一連の挿絵を手がかりに、心理療法の中で医師と患者の間に起こる転移現象を論じる。ユングによれば、錬金術師が金属を通して構築した諸理論は「まず第一に無意識内容が投影されたもの」³⁵⁾にほかならず、「医師が無意識と取り組む中で観察することができるあの心の現象をおおまかに概説するばかりでなく、しばしば驚くほど詳細に描いて」³⁶⁾いた。この数世紀にわたる陰の西欧精神史のなかに自らの心理学理論の歴史的基盤を見出し、錬金術師が不滅の《賢者の石》を追い求めた《作業 opus》を、転移を通じて展開される「自己」実現(「個性化」)の過程になぞらえたのである³⁷⁾。では、現実の他者との転移関係になぞらえられる一連の絵のなかで、「個性化」がどのように進行するとユングは解釈したのか。(挿絵については、絵 1～10を適宜参照されたい。³⁸⁾)

絵 1 は「メルクリウスの泉」と題され、過程の全体を描いている。四隅の星は対立する四元素を、心理学的には「内的な統合に到達していない人間の多元的な状態」³⁹⁾を表す。下方の丸い水槽は《錬金術の容器》を表し、この中で以降の作業が行われる⁴⁰⁾。ここから無意識を象徴するメルクリウス⁴¹⁾の泉が上昇し、管から流れ出ている。錬金術師が《容器》の中で対立する要素を結合させ、一つの分割できない性質(《賢者の石》)に辿り着こうとしたように、ユングの考える「個性化」もまた、心の中の対立する要素を和解させ、それらの要素を併せ持った「個性(分かちえぬもの)Individuum」へと向かうプロセスを意味していた。以下の過程が男性性と女性性による性的結合の象徴によって描かれるのは、「その結合が一を[...]生み出す手段だからである」。⁴²⁾

続く絵 2 以降が《作業》の細部を表している。「王と女王」と題された絵 2 では、宮廷服を着た男女が出会う。心理学的には「人間的な出会い」⁴³⁾を描いているが、互いの相手に対する構えはいまだ型どおりのものである。左手の握手は、左側が無意識を象徴することから、これから起こる関係が「感情の一衝動的」⁴⁴⁾性質をもつ、

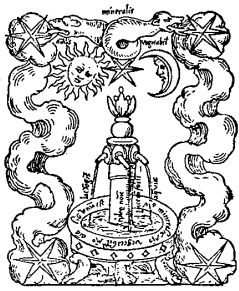
禁じられたものであることを暗示している。なお、この出会いは同時に、投影によって王の姿で現れた女性のアニムス(男性的要素)と女王の姿で現れた男性のアニマ(女性的要素)の出会いをも意味していることに注意しなければならない。

さて絵 3 に進むと、二人は先ほどまでの「因習の覆いを脱ぎ捨て」⁴⁵⁾、裸の姿で向かい合う。これは、現実に対応するための仮面の下に隠されていた互いのありのままの姿との直面を意味する。二人が裸になったことによって、今や意識されてこなかった無意識の動物的衝動が開示され、親和力の危険が高まる⁴⁶⁾のである。このことによって、「上昇する無意識の泉は王と女王にまで達し、[...]彼らは、浴槽の水に漬かるように、その中に体を沈めた」⁴⁷⁾。こうして、無意識への下降が始まる(絵 4)。メルクリウスは下から上昇する泉の水として、二人を《溶解》へと誘う。そしてついに二人は海に呑み込まれ、結合する(絵 5)。「避けがたい心的感応によって」⁴⁸⁾、二人は分離困難な融即状態、「無意識的同一性」⁴⁹⁾に巻き込まれるのである。すでに《対立物の結合》が果たされたようにも見えるが、この《結合》があくまで水の中、すなわち無意識領域でなされていることから、いまだ目標には到達していない⁵⁰⁾。

二人の自我は、無意識に呑み込まれたことによって見せかけの統一を奪われ、「意識のエネルギーが低下し、自らの人格が持つ意味とその広がり分なくなる」⁵¹⁾。絵 6「死」はこの意識の消滅を、絵 7「魂の上昇」は、憑依・分裂病にも類似する心理的な「方向喪失」⁵²⁾状態を示している。無意識という超越的次元での事柄の氾濫に、自我意識が溺れてしまっているのである。しかし、時間と空間の中で生きるわれわれは、「自分自身をいわずに「永遠の中にいる」状態から区別しなければならない」⁵³⁾。そこで「浄化」と題された絵 8 では、清めの露が滴り落ち、無意識の氾濫からの弁別、つまり無意識で行われた象徴的内容の意識化が行われる。弁別が成就することによって、再び魂が帰還(絵 9)し、自己の達成(絵 10)へと至る。以上が、一連の過程の大まかな要約である。

B. 「客観的な関係の過程」の三形態

さて、第Ⅱ節の最後に引用した箇所において、この過程では、「内的主観的な統合過程」と「客観的な関係の過程」が互いに不可欠なものであると述べられていた。今一度、『転移の心理学』から取り出された、図 1 に戻ろう。「内的主観的な統合過程」は図 1 の矢印 c, d (治療者・患者それぞれの内的な事象)に相当する。こ



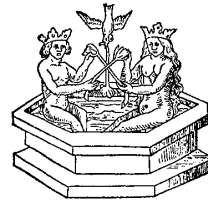
絵1



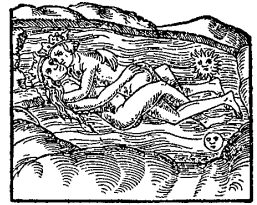
絵2



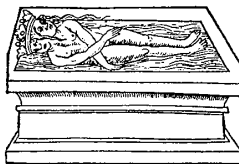
絵3



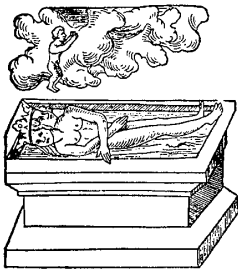
絵4



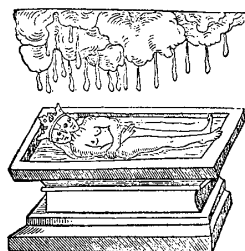
絵5



絵6



絵7



絵8



絵9



絵10

『哲学者の薔薇園』の挿絵

これはまさに、ユングが他の著作において常に中心的に論じてきた自我と無意識の関係にほかならず、今まで見てきた内容からも比較的容易に見て取れる⁵⁴⁾。しかしその側面にとって、「客観的な関係の過程」がいかなる意味で不可欠であるというのか⁵⁵⁾。

図1において、矢印c,dの間に描かれた四つの矢印a,b,e,fは、それぞれ具体的な他者との「客観的な関係」の別様のあり方を示していた。本論では、これを以下の三つの形態に分類し、分析を試みる。第一に、無意識を投影しあう関係(転移の相互性・交差する矢印e,f)として、第二に、「無意識的同一性」にともに感染するもの(相互的無意識・矢印b)として、第三に、現実生活における関係(身体的存在・矢印a)として、それぞれが作用し、全体的な「個性化」の場を形作っているのではあるまいか。三つの形態それぞれに関して、以下に詳しく言及する⁵⁶⁾。

まず、相互に無意識を投影しあう関係(矢印e,f)についてである。ユングは、無意識を抑圧された個人的経験の単なる貯蔵庫(「個人的無意識」)とはみなさず、個人の経験をを超えて普遍的に見られる非個人的なところ Seele の場と捉え、これを「集合的無意識」⁵⁷⁾と名づけた。しかし無意識であるがゆえに、この内容を直接認識することはできない。無意識はつねに投影として現れるのである。そしてアニマやアニムスを含めた集合的無意識のすべての元型的内容は、ふさわしい相手

がいて初めて姿を現わすという。「対応する人物が介在しないかぎり布置されない」⁵⁸⁾のである。これについてユングは以下のように述べている。

「投影の受け手とは、けっして任意のXという対象ではなく、つねに投影される内容の性質にふさわしいことが証明された、あるいは掛けるものにふさわしい掛け釘を提供するようなものなのである。」⁵⁹⁾

二人の人間が無意識の内容を投影し合い、個的な現実を持った目の前の相手にふさわしい内容が布置されたとき、集合的無意識はその一回限りの固有の仕方て姿を現す(e,f)。こうして、「超越的な事象それ自体が、投影によって意識的かつ個人的な心を激しく巻き添えにしながら、現実のものとなる」⁶⁰⁾のである。絵2～4は、この過程を中心に描いているといえよう。

そして、続く絵5～7が、「客観的な過程」の第二のあり方(矢印b)を示しているといえる。二人は投影によって、絵2ですでに暗示されていた「家族的-近親相姦の雰囲気の中に引き込まれ」⁶¹⁾ている。自分に投影されているものと自分自身とを区別することができず、「デモニッシュなものをはらむ暗闇」⁶²⁾に巻き込まれる。こうして、「無意識的同一性」が作り出されるのである。たとえば、「男女の間に何らかの無意識的な同一化が起きると、男性は女性のアニムスの特徴を引き受け、また女性は男性のアニマの特徴を引き受ける」⁶³⁾ことになり、それら元型同士の《結合》の衝動に同一化

してしまう。二人の意識のエネルギーは低下し、自我は統一を失って、自らの広がりを見失ってしまうのだ。タヴィストック講義では、この融即の状態の危険性が繰り返し述べられていた。医師がこの状況に気づくことができなければ、患者とともに無意識に飲み込まれ、性愛的な衝動が行動化される可能性も生じてしまう。それゆえに、ユングはこれを治療における悲惨な状況と呼び、「転移がなければ、それだけで結構なこと」⁶⁴⁾などと、強い口調で危険視していたのである。ところが『転移の心理学』では、この同一化の状況が、「死」や「腐敗」であると同時に、再生に必要な中間段階であるとみなされる⁶⁵⁾。タヴィストック講義で明らかにされなかった同一化からの回復の過程が、この後に続いて描かれるのである。

絵8～9に示される回復の過程は、『浄化』あるいは「区別過程」と呼ばれている。すなわちこの過程の目的は、同一化において生じている《結合》の衝動が本来集合的無意識という超越的な次元の事柄であることに気づき、自分自身と相手自身を無意識の内容から区別することにあるとされるのだ。ここで「客観的な過程」の第三のあり方、つまり現実生活における関係(矢印a)が以下のような意味を持つ。

同一化においては、自我が無意識に飲み込まれ、統一を失っている。しかし、本来「自我は時間と空間の中で生きており、そもそも存在するためには、時空の法則に適応しなければならない」⁶⁶⁾。双方の自我を融即的な無意識の同一性から救い出し、時空の法則に従った意識の世界に戻らねばならないのである。このためには、本来超越的なもの⁶⁷⁾であるはずの元型同士の《結合》のストーリーから、自分自身と相手とを区別しなければならない。この行為こそ、「内的な対決」(矢印c, d)にほかならない。相手が自分に投影している内容と自分自身を、また自分が相手に投影している内容と相手自身を引き剥がし、同時にそれまで相手に投影していた自分自身の性質と徹底的に向き合わねばならないのである。この対決ができなければ、両者とも投影された元型と同一化したままの状態にとどまらざるをえない。ここで、この過程を助けるものこそ、自分と相手の「個的な現実」⁶⁸⁾同士の関係(矢印a)である。ユングは以下のように述べている。

「心理学の区別過程もけっして楽な仕事ではなく、粘り強い忍耐を要求する。そうした取り組みは、錬金術のシンボル体系から明らかであるように、人間の相手との関係がなければまったく不可能である。[...]それは、同胞との関係の中で現実化し、自分自身にも他

人にも明瞭なものとなるとき、切迫した問題となる。そのとき初めて現実のものと感じられ、その本当の性質が認識されうるのだ。」⁶⁹⁾

身体的存在として、相手との関係の中で現実化する問題に目を向けるなかで、二人は決して乗り越えることのできない互いの他者性に出会う。自分が投影していた姿に還元しえない相手の「個的な現実」によって、投影そのものに気づかされることになるのである。相手が持っている性質としか思われなかったものが、実は見えなかった自分の一側面であったことを知る。この事実に向かい、向き合うことこそ「内的な統合過程」にほかならず、これをもって二人は現実の世界へと帰還するのである。しかし、二人がこの過程を通して回復した意識は、以前と同じものではない。

絵10では、再び現実の世界へとよみがえった姿が、両性具有体の姿で象徴的に描かれる。ユングはこれを「自己」を示すシンボルであると考えた。この新しい人格は、「けっして意識と無意識の中間の第三のものではなく、その両方である」⁷⁰⁾という。無意識の内容を克服するのではなく、それと折り合いをつけること、この過程を通じて矛盾と二律背反に満ちた無意識の原理をはらんだ意識、「自我であると同時に非-自我であり、主観的かつ客観的、個別的かつ集合的」⁷¹⁾な「自己」が達成されるというのである。

以上、「客観的な関係の過程」を三つの形態に分類し、それらが一連の過程においていかに関わっているのかについて考察した。これを見るかぎり、「内的主観的な統合過程」が起きるためには、無意識が具体的な一人の他者に投影され(矢印e, f)、「無意識の同一性」(矢印b)の状態に引き入れられること、そして現実生活での他者の他者性(矢印a)によって投影に気づくことが必要となる。ある具体的な他者との関わりが、「個性化」の過程を可能にしているのである。

C. 目標としての「自己」・過程の循環性

それでは、ある相手との間でこの一連の過程をたどれば、「自己」は実現されたことになるのだろうか。一度「自己」に到達してしまえば、もはや他者との関わりは必要でなくなってしまうのか。やはりそうではないことが、テキストにおいて示唆されている。手がかりは、「過程の循環性」である。

まずユングは、錬金術における《賢者の石》が「数世紀にわたって捜し求められ、ついに発見されなかった」⁷²⁾ように、「自己」とはあくまでシンボルであり、目標にほかならないことを強調し、次のように述べている。

「この統合のシンボルの兆しが一度現われたからといって、統合がすでに達成されたということではけっしてない。[...]心の対立項の緊張も徐々にしか扱えない。錬金術の最終生産物がなおも本質的に分裂を示しているように、人格が統合されたとしても《二つの本性》という苦しい感情が完全になることはない。[...]目標はただ理想として重要であるにすぎない。目標へと導く《作業》こそ本質的なものなのだ。《作業》は人生を続けることを意味で満たす。」⁷³⁾

「心の対立項の緊張」が徐々にほぐされてゆく過程。ここで《作業》の全体を描いていた絵1に戻ろう。メルクリウスの逆説性を表す二匹の蛇の口からは、二本の煙柱が出ている。ユングは、この二本の蒸気が「結露し、もう一度この過程を最初からやり直すことによって繰り返し昇華あるいは蒸留」⁷⁴⁾されると述べる。また、水槽から上昇するメルクリウスの泉がふたたび同じ水槽に戻ることから、この過程が「完結した循環」⁷⁵⁾をなしていることが示唆されているというのである。この点についてエディンガー(1994)は、『哲学者の薔薇園』の10枚の挿絵は直線状に示すよりも「循環 cycle を示す一つの円に並べ替えるほうが適切である」⁷⁶⁾と述べる。そうすれば、「これらを一つ一つの独立した出来事としてではなく、何度も繰り返される一連の心理学的事象として考えることができる」というのだ⁷⁷⁾。

一人の他者と向き合い、「内的対立」に取り組めたとしても、互いの統合の過程が一度きりで達成されるわけではない。繰り返し、何度も格闘することの中にこそ、ようやく統合の道が開けるといっているのである。また、首尾よくこの過程が進んだとしても、これはその相手に投影しえた無意識内容との対決に過ぎない。現実生活で出会い、深く関わる相手のすべてが、自分に対決の機会を与えている。人は「人生の途上で、無数の変装した自分自身に繰り返し出会っている」⁷⁸⁾のである。「個性化」とはこの努力を繰り返す過程を意味していたのだ。そのうちに、「次第に他の人間を認識できるようになり、また自己認識もできるようになり、それによって自分自身の本来の姿と、他人が彼に投影している姿との、あるいは彼が自分自身について想像している姿との区別がつくようになる」⁷⁹⁾という。

関係の過程によって引き起こされた「内的主観的な過程」が、また現実の人間関係を助ける。ユングの意図した「個性化」の二つの側面とは、このように相互に絡み合って循環を織りなし、「個性化過程」を駆動するダイナミズムであったのではあるまいか。

おわりに

本研究では、ユングの「個性化」論における他者性の問題について考察を試みた。ブーバーの論をはじめとして、「個性化」論に他者性の欠如を指摘する批判は多く存在する。本論では、この批判に回答する手がかりをユングの転移論に求めた。ユングは「転移」を他者をつねに必要なとする「関係の一形態」と捉え、「個性化」にとって重要な要素であると考えている。そこで本論では、『転移の心理学』を分析することにより、具体的な他者との「客観的な関係の過程」が、「個性化」において以下の三つの形態、すなわち無意識を投影しあう関係、「無意識的同一性」にともに感染する関係、現実生活における関係を通して必要不可欠なものであることを明らかにした。また「個性化」が循環の過程であり、人生を通じて繰り返されることから、「内的主観的な統合過程」もまた次の「客観的な関係の過程」を促進するものであり、二つが「個性化」の一側面として相互不可欠なものであることが示された。

しかしながら、本論では紙幅の都合上、『転移の心理学』に限って分析するに留まり、ユングの他の重要な著作に言及するまでに至らなかった。とりわけ、ユングが『転移の心理学』をその入門書と位置づける『結合の神秘』は、ユング後期における錬金術研究の集大成ともいえる大著であり、「他者性」の問題に関しても多くの示唆に富んでいる。また、第I節にて触れたブーバーの批判は、ブーバーがユングの熱心な読者であり、両者の思想が一時期、非常に接近したことを考えれば、単なる誤解として片付けることのできない含みを持っており⁸⁰⁾、これに回答することも重要な問題であると思われる。

以上を今後の課題として提示しつつ、本稿を閉じることにする。
(指導教員 西平直准教授)

註

- 1) Jung, C.G.(1928), Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten, *Gesammelte Werke Bd.7*, Olten: Walter-Verlag, 1981, § 266. 以下, Walter-Verlag の独語版ユング全集は GW と略記する。全集の引用箇所は段落番号 (§) にて示し, 表記の無い場合はページ数を記す。
- 2) 河合は、ユングの「個性化」概念が時期によって以下の三つの意味に変遷してきていることを指摘している。①初期: 意識が無意識の力、特に母親的なものから解放されること、②中期: 意識の一面的な生き方に対して、無意識における補償する面を取り入れて、こころの全体性を実現すること、③後期: 自我と無

意識の関係より、こころ全体における対立するものの結合、中心化(河合俊雄『ユング魂の現実性』, 講談社, 1998, 286頁)。また、湯浅は1911-12年の『リビドーの変容と象徴』と1952年の改訂版『変容の象徴』を読み比べることで、ユングにおける「変容」概念の東洋思想との接触による変遷を論じている(湯浅泰雄『ユングと東洋』, 人文書院, 1989, 下61-87頁)。このように時期によってユングの「個性化」論の力点は微妙に変化していくため、丁寧に切り分けていく作業が必要である。

- 3) この問題について論じたものとして、堀江宗正「現代思想と宗教心理」、島藺進・西平直編『宗教心理の探究』, 東京大学出版会, 2001があげられる。堀江は、「他者論」の洗礼を経た現代思想に対し、宗教心理学的自己実現論が回答しうる可能性は、「独我論的自己実現論から多元主義的自己実現論へ」の転回にあるとしている。
- 4) たとえば、大貫隆「ないないづくしの神」、宮本久雄・山本巍・大貫隆『聖書の言語を超えて：ソクラテス・イエス・グノーシス』, 東京大学出版会, 1997および大貫隆『グノーシス考』, 岩波書店, 2000を参照。大貫は、ユングの「個性化」論が失われた全体性を再び回復させる過程を描くものであるとして、そこにグノーシスと同型の構造を見出す。そして「個性化」においては、グノーシス主義者たちと同様、目指される先の無限大に膨張した自己に他者が含まれておらず、関係性に欠けていると指摘している。
- 5) 1952年2月、「宗教と現代的思惟」がドイツのメルクール誌に掲載される。ここでブーバーは、現代の無神論的傾向を代表する思想家として、サルトル・ハイデッガー・ユングの三人をあげ、批判した。これを受けて同年5月、ユングが同誌に「ブーバーへの答え」と題する論文を寄せ、これに対するブーバーの「ユングの返答に答える」とともに掲載された。二人の公式の議論は、以上の三本の論文に限られる。
- 6) Buber, M., *Religion und modernes Denken, Gottesfinsternis*, Zürich: Manesse Verlag, 1953, SS.76-114.
- 7) *ibid.*, S.111. []内は引用者。
- 8) *ibid.*, S.110.
- 9) *ibid.*, S.110.
- 10) Jung, C.G., *Eine Antwort auf Martin Buber*, *GW Bd.18/2*, 1981.
- 11) ユングの回答のうちでこれに関連すると思われるのは、唯一以下の箇所である。「ここで私は、しばしば受けるもう一つの誤解に触れたい。投影を「取り下げ」たら、客体には何ものも残らないとする、おかしな仮定のことである。もしも私がある人についての自分の誤った判断を正したとしても、私がそれによって彼を否定したことにはならないし、彼を消してしまうことにもならない。それどころか、私は今や彼をより正しく見るようになり、二人の関係の助けにさえなるのである(*ibid.*, § 1511)」。
- 12) Jung, C.G., *The Visions Seminars, Book Two*, Zürich: Spring Publications, 1976, p.506. 傍点は引用者。
- 13) たとえば、Jung, C.G., *Die Bedeutung der Analytischen Psychologie für die Erziehung*, *GW Bd.17*, 1972を参照。
- 14) Jung, C.G. (1946), *Die Psychologie der Übertragung*, *GW Bd.16*, 1979.
- 15) Jacoby, M., *The Analytic Encounter: Transference and Human Relationship*, Toronto: Inner City Books, 1984, p.25f. 『転移の心理学』のオリジナルの図は、「錬金術師」と「神秘の妹」、それぞれ

の「アニマ」「アニムス」との関係を描いている。ヤコービによる図は、これをより一般化したものである。

- 16) Jung, C.G. (1929), *Die Probleme der modernen Psychotherapie*, *GW Bd.16*, 1979.
- 17) Jung, C.G. (1935), *Analytical Psychology: Its Theory and Practice. The Tavistock Lectures*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1968.
- 18) 垂谷も、ユングが転移についてまとめた見解を示しているのはこの三つに限られると述べている(垂谷茂弘「個体化における他者と世界の問題」, 『宗教哲学研究』No.5, 1988, 79頁)。
- 19) ユングの転移観の変化に関しては、伊藤良子『心理治療と転移』, 誠信書房, 2001, 第4章およびSteinberg, W., *The Evolution of Jung's Ideas on the Transference*, *Journal of Analytical Psychology* 33, 1988, pp.21-37. に詳しい。この両者は、ユングの「逆転移」に関する考えは徐々に発展していくものの、基本的な態度は不変であるとする立場をとる。ただし、タヴィストック講義での「転移はつねに妨害(Jung 1935, p.169)」といった発言を根拠に、ユングが転移の重要性に対し矛盾した態度をとっていたとする論も少なからず存在している。この点に関しては稿を改めて検討する必要があるが、本論はユングの転移論における「相互性」の視点に着目するうえで、主に前者の立場に与するものである。
- 20) ユング自身が述べているように、このことは両者の面接技法の違いに表れている。フロイトが患者を寝椅子に寝かせ、治療者はその背後に座り、姿を見せずに分析を進めたのに対し、ユングは初めから患者と対面して座り、面接を行った(Jung 1946, § 358, Anm.16)。
- 21) Jung 1929, § 163.
- 22) *ibid.*, § 163.
- 23) Jung 1935, p.157.
- 24) *ibid.*, p.167.
- 25) *ibid.*, p.186.
- 26) この点こそ、ユング派のM.フォーダムらが批判するところである。「分析治療者はすでに自分自身の分析と訓練を済ませており、さらに多かれ少なかれ以前に患者を分析した経験がある。[...] 分析において分析家が患者と同じであるという考えは修正されねばならない。分析家が患者と同じような窮地に落ち込む傾向は極めて小さい(Fordham, M., *Transference and Countertransference, Jungian Psychotherapy*, New York: Wiley, 1978, p.86)」。
- 27) 伊藤は「ユングは、この〈非対称性〉に強い転移の生じる源があることに気づいていたからこそ、このような形で生じる転移を回避するために、治療関係の〈相互性〉を重視したのである(伊藤, 前掲書, 72頁)」と述べ、〈相互性〉によって〈非対称性〉を解消できるものではないとしている。
- 28) Jung 1946, § 538.
- 29) *ibid.*, § 357, Anm.14.
- 30) *ibid.*, § 538.
- 31) *ibid.*, Vorrede, S.168. 傍点は原文イタリック。
- 32) 林は、二者関係における「個性化」について考察するにあたり、以下のように述べている。「じつはその問題を論じたものが、ユングの数多い業績の中に一つだけ存在している。それは[...]『転移の心理学』である(林道義『ユング思想の真髄』, 朝日新聞社, 1998年, 248頁)」。

- 33) Jung 1946, § 448.
- 34) ここでは、現実的な他者の存在を前提として生じる関係をユングの言う「客観的な objective 関係の過程」として振り分ける。
- 35) *ibid.*, § 538.
- 36) *ibid.*, § 399.
- 37) ユングは自伝において、以下のように振り返っている。「錬金術師たちの経験は私の経験したことであり、彼らの世界はある意味で私の世界であった。これはもちろん、私にとって素晴らしい発見だった。それによって私は、無意識の心理学への歴史的な対応物を見出したのだから (Jung, C.G., *Erinnerungen, Träume, Gedanken*, Zürich: Walter-Verlag, 1971, S.209)」。
- 38) 10枚の挿絵はいずれも、林道義・磯上恵子訳『転移の心理学』、みすず書房、1994より転載したものである。
- 39) Jung 1946, § 406.
- 40) *ibid.*, § 402.
- 41) 化学物質では、常温で液状の唯一の金属である水銀のこと。「生ける銀」。「メルクリウスはまさしく無意識が人格化されたものであり、それゆえ本質的に《二重性》、背理的な二つの本性をもっている (*ibid.*, § 389)」。
- 42) *ibid.*, § 404.
- 43) *ibid.*, § 419.
- 44) *ibid.*, § 419.
- 45) *ibid.*, § 452.
- 46) *ibid.*, § 452.
- 47) *ibid.*, § 453.
- 48) *ibid.*, § 399.
- 49) *ibid.*, § 376. ユングによればこの状態は、未開の心性を表すレヴィ＝ブリュールの「神秘的融即」にたとえることができるが、「無意識の同一性」が自然の原初状態ではなく、過程の産物であるという意味で区別されるという (*ibid.*, § 462)。
- 50) *ibid.*, § 459.
- 51) *ibid.*, § 399.
- 52) *ibid.*, § 476.
- 53) *ibid.*, § 502.
- 54) 『転移の心理学』を関係の過程としてではなく「内的主観的な」過程に絞って分析した研究は多く見られる。たとえば河合は『哲学者の薔薇園』の10枚の絵と仏教の十牛図との間に関連を見出し、そこに『転移の心理学』の内容を重ね合わせて論じ (河合隼雄『ユング心理学と仏教』, 岩波書店, 1995, 67-118頁), また湯浅は『転移の心理学』がキリスト教と異教的要素の混在した錬金術のエロスの原理を中心的に解明したものであるとして分析している (湯浅泰雄『ユングとヨーロッパ精神』, 人文書院, 1979, 109-127頁)。また、河東はユングの宗教心理学的な錬金術研究の一端として『転移の心理学』を取り上げている (河東仁『ユングの思想と宗教心理学』, 前掲『宗教心理の探求』, 125-146頁) が、「以下の図像において読み取られる転移現象は、錬金術の作業に女性の助手が伴われることもあったとはいえ、医師と患者といった二者関係において生ずるものではなく、あくまでも錬金術師個々人の内奥において生ずる[...]内なる異性像を意識領域に統合してゆく過程を意味する (144頁)」と述べるなど、もっぱら「内的主観的な」問題として扱っている。
- 55) もっとも、『転移の心理学』から「客観的な関係の過程」を取り出すとする試みはすでに存在している。たとえば垂谷, 前掲論文, 1988および垂谷茂弘「ユングの転移観における宗教的次元」, 『宗教哲学研究』N0.20, 2003, 濱野清志「個体と集合—ユングにおける神秘的融即」, 山中康裕・斉藤久美子編『臨床的知の探究 (下)』, 創元社, 1988, 83-102頁など。しかしそこでは、垂谷が「転移を論じた著作ではあるが『PÜ[転移の心理学]』を読むかぎり B[客観的な関係]の側面は明確に浮かびあがらぬ印象を受ける ([]内は引用者)」と述べている (垂谷, 1988, 82頁) ように、具体的な他者との関係が明確には抽出されない印象を受ける。本論は、ブーバーらの批判に答える手がかりを『転移の心理学』に求めることで、再度この問題に答えようとするものである。
- 56) ユングはこの図式を提示した箇所に続いて、「実際にはこれらがつねに混ざり合っている」ので、挿絵を論じる際の混乱を避けるために、そのつど区別することはしなかったと述べている。たとえば、絵の中では王と女王が同時に人間的・元型の形姿として描かれており、無意識の象徴ゆえの矛盾が避けられないからである (Jung 1946, § 424)。本論は以下に関係の過程の三形態を順に分析していくが、それらは必ずしも時系列的・段階的・因果的に発生するのではなく、過程の進度によっていずれかの面が強調され、中心的に現れるものとして捉えている。たとえば第二の関係は、左手の握手に象徴されるように、第一の関係を前面に表す絵2～4においてすでに暗示されているのである (*ibid.*, § 419)。
- 57) ユングによれば、集合的無意識における元型は「個々人に生得のものではあるが、その人物によって修正されることも占領されることもできないものである。このころは個々人の中で同一のものであり、多くの人の中で、結局はすべての人の中で同一のものなのだ。波を支える海のように、ここは一人一人の人間の心の前提をなしている (*ibid.*, § 354)」。
- 58) *ibid.*, § 469.
- 59) *ibid.*, § 499.
- 60) *ibid.*, § 500.
- 61) *ibid.*, § 368.
- 62) *ibid.*, § 375.
- 63) *ibid.*, § 469.
- 64) Jung 1935, p.170.
- 65) Jung 1946, § 467. ここまでに起こる強い結びつきは、「作業の産物 (*ibid.*, § 376)」であるとはいえ、無意識の「誘導効果 (*ibid.*, § 364)」による不可避的な性質のものである。この先の過程こそ、意識的努力を要する「個性化」の要諦であるといえる。
- 66) *ibid.*, § 502.
- 67) ユングは、「私のアニマとか私のアニムスという言い方よりも、むしろアニマなるもの *der Anima* とかアニムスなるもの *dem Animus* という言い方をしばしば勧めたいほど (*ibid.*, § 469)」であると述べている。この《結合》の物語は、二人の間で行われるものではなく、あくまで超越的な次元での達成を目指しているのである。ギーゲリッヒは、ここに「対話」を超えた「弁証法的」構造を見る。「対話が二人の人の間の相互作用やコミュニケーションであるのに対して、弁証法の構造には三元性が属している。それゆえにセラピーの弁証法的な理解は、医者と患者とが二人だけではないのではなく、常に第三の要因、第三の「人」が共に存在していることを暗に意味する (Giegerich, W., *Die Neurose der*

Psychologie oder Das Dritte der Zwei, *Analytische Psychologie* 9, 1978, S.242 =「心理学の神経症—二人における第三のもの」, 河合俊雄監訳『魂と歴史性』, 日本評論社, 2000, 4 頁)」。この第三の「人」は「共通の無意識」を指す。二人の人間はそれに巻き込まれながら、「この客観的な第三の要因と一緒に注意を向けている」というのである。

68) Jung 1946, § 470.

69) *ibid.*, § 503.

70) *ibid.*, § 474.

71) *ibid.*, § 474.

72) *ibid.*, § 383.

73) *ibid.*, § 400.

74) *ibid.*, § 403.

75) *ibid.*, § 409.

76) Edinger, E. F., *The Mystery of THE CONIUNCTIO: Alchemical Image of Individuation*, Toront : Innner City Books, 1994, p.36.

77) エディンガーはさらに、ユングが絵10と関連付けて引用した16世紀の錬金術の詩の以下の部分に注目する。「そこ[泉]から二匹の鷺が飛び立ち、その羽を焦がして／裸になってもう一度大地へと落下する。／そしてたちまち羽をまとして再び飛び立つ([]内は引用者)」。そして、この「二匹の鷺は、昇華と凝固の組み合わせのイメージであり、それがこの一連の絵の中で行なわれていたことである」と述べている。つまり、「循環、徐々に対立物を統合していく人生の全ての側面が円環状に繰り返されるのを表わしている」というのである(*ibid.*, p.102)。

78) Jung 1946, § 534.

79) *ibid.*, § 471.

80) ユングにおける人間関係をプーバーの「我-汝」「我-それ」の関係になぞらえたものに、Jacoby, *a.a.O.* および Gordon, R., *Transference as a Fulcrum of Analysis*, *Journal of Analytical Psychology* 13-2, 1968 があるが、いずれも『我と汝』のみを参照するなど、プーバー思想を詳細に考察したものではないため不十分なものとなっており、今後の検討を要する。